

**音楽的な見方・考え方を働かせ、音楽を工夫するよさを味わう子供を育てる音楽科学習指導**

鑑賞とリコーダーの活動を関連させた音の「見える化」の活動を中心として

遠賀町立島門小学校

教諭 米盛 夏海

こんな手立てによって…

こんな成果があった！

鑑賞とリコーダーの活動を関連させる  
題材構成の工夫や、音の「見える化」ポ  
ードの活用によって

子供が、音楽的な見方・考え方を働か  
せ、音楽を工夫するよさを味わうこと  
ができた

### 1 考えた

本学級の子供たちは、音楽の要素等と自分の思いを関係づけることや、友達との交流によって技能を高め合ったり、工夫したりすることが十分ではない。そこで、音楽的な見方・考え方を働かせ、音楽を工夫するよさを味わう子供を育てるために、題材構成の工夫と、音の「見える化」の活動の工夫により、鑑賞とリコーダーの活動を関連させる音の「見える化」の活動を中心として設定した。

### 2 やって見た

実践1では、題材の構成を工夫し、鑑賞とリコーダーの活動を関連させたことによって、鑑賞の学習をもとにリコーダーの学習に取り組むことができた。また、聴く視点を明示したことによって、それをもとに音楽を聴いたり工夫したりすることや自分の思いと関係づけることができおり、音楽的な見方・考え方を働かせることができた。

実践2では、自分たちの課題を客観的に捉えさせ、このように演奏したいという思いと比較させたことで、工夫する見通しを明確にし、そのよさを見いだすことができるようになった。また、グループの人数構成を6人として、聴き役の子供が工夫の効果について話し合う活動を設定したことで、工夫することによる演奏効果の変化を感じ、音楽を工夫するよさを味わうことができていた。

### 3 成果があった！

題材の構成を工夫したことで、鑑賞とリコーダーの活動の関連性を明確にすることができ、音楽的な見方・考え方を働かせる子供の姿が多く見られた。また、聴く視点を明示したことで、音楽的な見方・考え方を働かせるきっかけを作ったり、音楽を捉える視点や気づきを共有したりすることができた。

音の「見える化」を図ったことで、聴覚的な情報を視覚的な情報に転換することができ、思考を深めることができた。また、交流する活動において、視覚的に比較することで、気づきの深まりが見られ、音楽を工夫するよさを味わうことができた。

## <目次>

### 音楽的な見方・考え方を働かせ、音楽を工夫するよさを味わう子供を育てる音楽科学習指導

#### 鑑賞とリコーダーの活動を関連させた音の「見える化」の活動を中心として

1	主題設定の理由	3
	(1) 現代社会の要請から	3
	(2) 学習指導要領の方向性から	3
	(3) 子供の実態から	4
2	主題の意味	6
	(1) 「音楽的な見方・考え方を働かせ」とは	6
	(2) 「音楽を工夫するよさを味わう子供を育てる」とは	7
	(3) 「鑑賞とリコーダーの活動を関連させた音の『見える化』の活動」とは	7
3	研究の目標	8
4	研究の仮説	8
5	研究の構想	8
	(1) 題材構成の工夫	8
	(2) 音の「見える化」の活動の工夫	9
6	研究の実際	11
	(1) 実践1の指導の実際と考察	11
	(2) 実践1の成果・課題からの修正点	16
	(3) 実践2の指導の実際と考察	17
7	成果と課題	22
	(1) 全体考察	22
	(2) 本研究で得られた成果	24
	(3) 今後の課題	24
	<参考文献>	24

## <本文>

### 音楽的な見方・考え方を働かせ、音楽を工夫するよさを味わう子供を育てる音楽科学習指導

#### 鑑賞とリコーダーの活動を関連させた音の「見える化」の活動を中心として

遠賀町立島門小学校

教諭 米盛 夏海

## 1 主題設定の理由

### (1) 現代社会の要請から

学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすること等が求められている。また、知識の習得は重要であるものの、これからの社会においては、身の回りに生じる様々な問題に自ら立ち向かい、その解決に向けて異なる多様な他者と協働して力を合わせながら、それぞれの状況に応じて解決方法を探り出していく力を育成することが求められている。こうした社会で活躍できる人材の育成に向けては「何ができるようになるか」が重要であり、そのためには「何を学ぶか」に加えて、「どのように学ぶか」が大切な視点として焦点化された。

### (2) 学習指導要領の方向性から

平成28年度12月に中央教育審議会から出された「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」では、小学校、中学校及び高等学校を通じた音楽科の課題について以下のように指摘されている(一部)。

感性を働かせ、他者と協働しながら音楽表現を生み出したり、音楽を聴いてそのよさや価値等を考えたりしていくこと、我が国や郷土の伝統音楽に親しみ、よさを一層味わえるようにしていくこと、生活や社会における音や音楽の働き、音楽文化について関心や理解を深めていくことについては、更なる充実が求められるところである。

小学校音楽科の改訂の基本的な考え方は、次のとおりである(一部)。

- ・音楽に対する感性を働かせ、他者と協働しながら、音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさなどを見いだしたりすることができるよう、内容の改善を図る。
- ・音や音楽と自分との関わりを築いていけるよう、生活や社会の中の音や音楽の働きについての意識を深める学習の充実を図る。

音楽科学習指導においては、子供が音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付けることによって、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育成することが目指されている。この資質・能力の育成に当たっては、児童が「音楽的な見方・考え方」を

働かせて、学習活動に取り組めるようにする必要があることを示されている。このことによって、児童が教科としての音楽を学ぶ意味を明確にされた。

教科の目標は、以下の通りである（一部）。

表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(2) 音楽表現を工夫することや、音楽を味わって聴くことができるようにする。

この目標は、小学校教育における音楽科が担うべき役割とその目指すところを示したものである。今回の改訂では、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育成することを目指す。その上で、育成を目指す資質・能力として、(2)に「思考力、判断力、表現力等」の育成に関する目標を示す構成としている。また、このような資質・能力を育成するためには、音楽的な見方・考え方を働かせることが必要であることを示している。

「思考力、判断力、表現力等」の育成に関する中学年の目標は、以下の通りである。

〔第3学年及び第4学年〕

(2) 音楽表現を考えて表現に対する思いや意図をもつことや、曲や演奏のよさなどを見だしながら音楽を味わって聴くことができるようにする。

器楽の活動は、学習指導要領によると、楽器で、曲の表現を工夫し、思いや意図をもって演奏するものであるとされている。さらに、器楽の活動において、音楽的な見方・考え方を働かせて学習することにより、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力は育成され、これからの生活にあふれる音楽と親しむことができる。子供たちにとって、これからの生活につながるこの資質・能力を育成することは大変意義深いといえる。この器楽の活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する内容は以下の通りである。

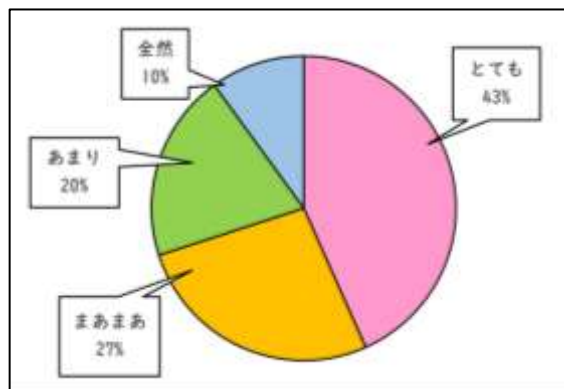
ア 器楽表現について知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲の特徴を捉えた表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いや意図をもつこと。

中学年では、思いや意図を言葉や音楽で伝え合うこと、実際に演奏してみることを繰り返しながら、曲の特徴を捉えた表現を工夫するよう促すことが重要となる。そのような器楽の活動の中で、低学年で身に付けてきた資質・能力を更に伸ばし、器楽表現を工夫する楽しさを味わい、思いや意図を膨らませるようにすることが大切である。また、子供が工夫した表現を互いに聴き合いながら、それぞれの表現のよさを認め合う体験を積み重ねることも大切なことである。本研究では、子供たちの親しみやすさから、リコーダーでの実践を扱う。

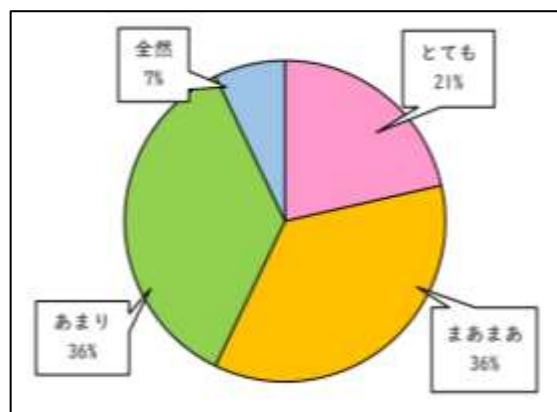
### (3) 子供の実態から

学級の子供たちは、友達と交流をしながら自分の考えを広げたり深めたりすることに学習の楽しみを感じており、互いの考えに対する関心が高い。また、自分の考えをもった上で交流し、学び合おうとする姿が多く見られる。

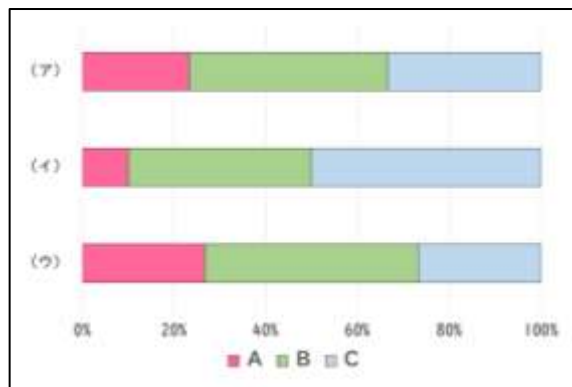
音楽科学習においても、友達と楽しみながら歌ったり楽器を演奏したりして活動している様子が多く見られる。活動中の子供たちを観察すると、楽譜を見ながら歌ったり演奏したりする活動や、自分の思いをプリント等を書いて交流する活動においては、互いに楽しむ姿が多く見られた。一方で、そのような視覚的な情報がない中での活動においては、交流しようとする姿が少なくなることがわかった。事前アンケートを実施したところ、「音楽科学習に対して関心を示すかどうか」という項目に対して、「とても関心がある。」と回答したのが43%、「まあまあ関心がある。」と回答したのが27%であり、7割の子供が肯定的な回答をした(資料1)。一方で、リコーダーの活動に対する関心を調査すると、「リコーダーの活動に対して関心を示すかどうか」という項目に対して、「とても関心がある。」と回答したのが21%、「まあまあ関心がある。」と回答したのが36%であり、肯定的な回答をしたのは、半数程度の子供であった(資料2)。「リコーダーをどのように演奏できるようになりたいか。」という項目に対しては、「きれいな音で」「まちがえずに」と9割の子供が回答した。活動中の様子を観察すると、活発に活動している子供が多く見られた。



資料1 「音楽科学習に対して関心があるか」



資料2 「リコーダーの活動に対して関心があるか」



資料3 事前評価

また、学習指導要領の内容から(ア) 節奏を聴いたり、ハ長調の楽譜を見たりして演奏する技能、(イ) 音色や響きに気をつけて、旋律楽器及び打楽器を演奏する技能、(ウ) 互いの楽器の音や副次的な旋律伴奏を聴いて、音を合わせて演奏する技能の3つの観点で評価したところ、半数程度の子供が目標を達成できていないことがわかった(資料3)

そこで、リコーダーの活動への関心について答えた理由を尋ねると、以下のような回答があった。

- ・楽譜がよくわからず、あまり好きではない。
- ・演奏するのは楽しいけれど、学習しても楽しさは感じられない。
- ・何と云えばよいかわからず、交流するのが難しい。
- ・どのように工夫すればよいのかわからない。



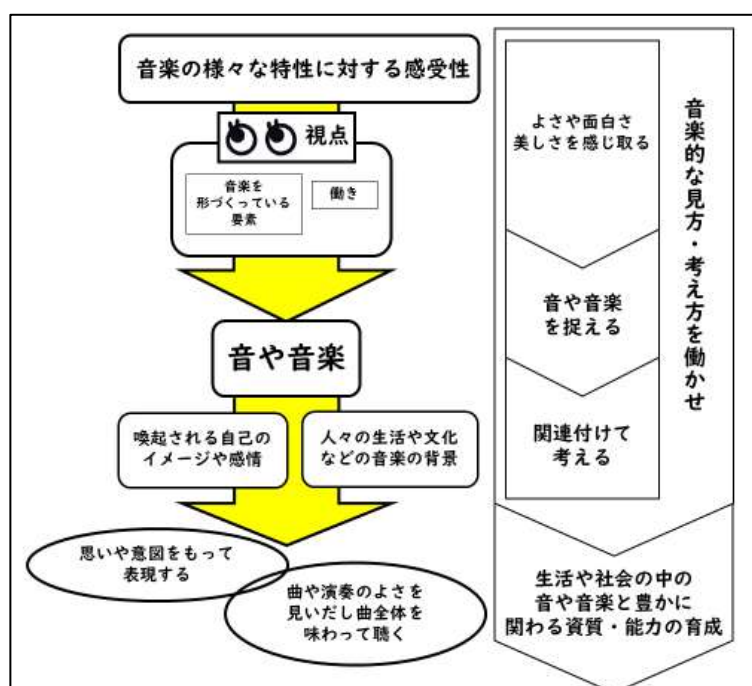
これらのことから、本学級の子供たちは、音楽科の学習に対して関心がある一方で、リコーダーの活動の技能に苦手意識があったり、音楽を工夫することに困難さを感じていたりすることがわかった。また、技能を高めることや、表現に対する思いが少なく、工夫するよさを見いだすことができていないこともわかった。これは、これまでのリコーダーの活動において、音楽の要素等と自分の思いを関係づける経験や、友達との交流によって技能を高め合ったり、工夫したりする活動を楽しむ経験が十分ではなかったからであると考えられる。

以上のことから、子供が音楽と自分を関係づけるための手立てが不十分であり、音楽的な見方・考え方を働かせることができていないことがわかった。また、友達と交流しようという意欲はあるものの、自分や友達がつくった音楽を比較できていないことから、学び合うことができず、音楽を工夫するよさを味わうまでには至っていないこともわかった。

## 2 主題の意味

### (1) 「音楽的な見方・考え方を働かせ」とは

「音楽的な見方・考え方」とは、音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きを視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などに関連づけることである。つまり、「音楽的な見方・考え方を働かせる」とは、自分の経験から、出会った音楽の構造を捉えたり、面白さを追究したりすることである（資料4）。このような音楽科の特質に応じた物事を捉える視



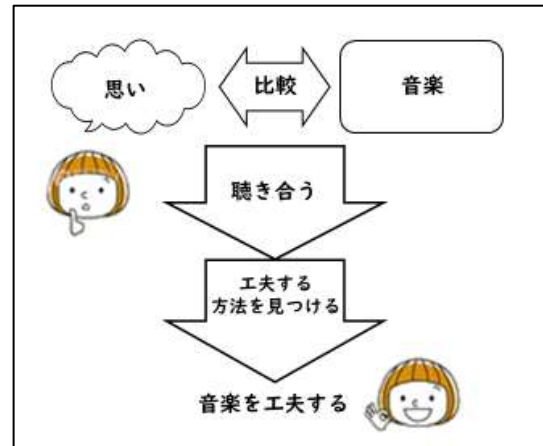
資料4 「音楽的な見方・考え方を働かせて」について

点や考え方を働かせることは、音楽科の目標である生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育成する上で重要である。小学校学習指導要領解説音楽編では、その資質・能力の育成に、音楽科における「知識及び技能」の習得、「思考力・判断力・表現力等」の育成、「学びに向かう力、人間性等」の涵養が目指されており、その前提として音楽的な見方・考え方を働かせることが位置づけられている。つまり、音楽的な見方・考え方を働かせることによって、子供は、音楽と自分との関わりを感じることができると考える。

本研究では、音楽的な見方・考え方を働かせることができるように、題材で軸となる音楽を形作っている要素を明確にし、子供がそれらを基に、音や音楽を捉え、音楽の構造と曲想との関わりなどについて考え、表現についての思いや意図をもったり、曲のよさを見だし味わって聴いたりする場を設定する。

## (2) 「音楽を工夫するよさを味わう子供を育てる」とは

「音楽を工夫するよさを味わう子供」とは、リコーダーの活動において、自分の音楽を工夫する経験を重ね、そのよさを深く感じている子供のことである(資料5)。本研究では、子供が表現への思いをもつことができるように、鑑賞の学習をもとに、その面白さをリコーダーの表現に関係づける活動を設定する。また、思いや意図をもって音楽を工夫することができるように、自分の思いと音楽を比較し、協働学習によって聴き合い、工夫する方法を見つける活動を



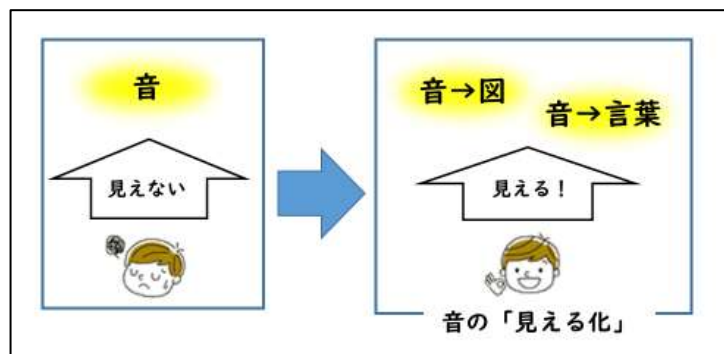
資料5 音楽を工夫するよさを味わう子供

設定する。さらに、活動の達成感を味わうことができるように、協働して客観的に聴いた技能の高まりを認め合う活動を設定する。このようにして表現を工夫し、音楽を工夫する楽しさを感じる経験を重ねることで、より一層自らの技能を高めることにつながり、音楽を工夫するよさを味わうことができると考える。したがって、「音楽を工夫するよさを味わう子供を育てる」とは、自分の音楽を工夫する経験を重ねる場を設定し、上記のような子供を育てることである。

## (3) 「鑑賞とリコーダーの活動を関連させた音の「見える化」の活動」とは

「鑑賞とリコーダーの活動を関連させる」とは、鑑賞とリコーダーの活動の関連性を明確にし、鑑賞の活動で学んだことをもとにリコーダーの活動を充実させることである。鑑賞の活動では、主に音楽的な見方・考え方を働かせるもとなる音楽を形づくっている要素とその働きを見つけたり、自分のイメージや感情をもつきっかけを作ったりする。リコーダーの活動では、思考を促す手がかりとして鑑賞の学習で見つけた要素や働き、自分のイメージ等と音楽を関係づけ、リコーダーの表現に対する思いをもって活動に取り組む。

「音の『見える化』の活動」とは、聴覚的な情報を視覚的な情報に変換するための思考ツールを用いた活動のことである。したがって、音楽を捉えられず、思うように交流することができない子供や、考えていることをうまく表現することができない子供への



資料6 音の「見える化」について

支援をすることができるように、音の「見える化」の活動で音楽を可視化する。鑑賞の活動においては、音を視覚的に捉えることができるように音の「見える化」の活動を設定する(資料6)。このようにして、子供は、音楽の構造と曲想や歌詞の内容との関わりといった知識について実感をもって理解することができる。リコーダーの活動においては、リコーダーの表現を工夫することができるように音の「見える化」の活動を設定する。このようにして、音楽的な見方・考え方を働かせることで、主体的に技能を身につけることもできると考える。

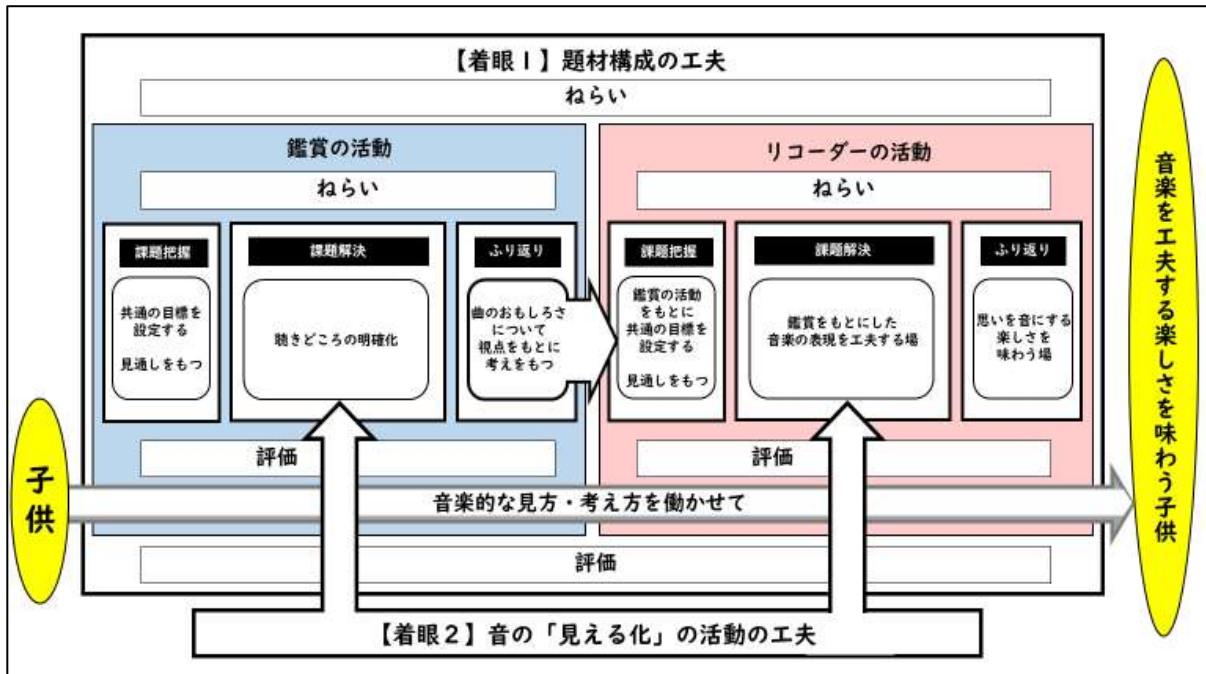
### 3 研究の目標

音楽科学習において、音楽的な見方・考え方を働かせ、音楽を工夫するよさを味わう子供を育てるために、鑑賞とリコーダーの活動を関連させる音の「見える化」の活動を中心とした学習指導の在り方を究明する。

### 4 研究の仮説

題材の中に鑑賞とリコーダーの活動を関連させる音の「見える化」の活動を中心として位置付ければ、音楽的な見方・考え方を働かせ、音楽を工夫するよさを味わう子供を育ててであろう。そのために、題材構成を工夫したり（着眼1）、音の「見える化」の活動の工夫をしたり（着眼2）する。

### 5 研究の構想



資料7 研究構想図

音楽的な見方・考え方を働かせ、音楽を工夫するよさを味わう子供を育てるために、題材構成の工夫と、音の「見える化」の活動の工夫により、鑑賞とリコーダーの活動を関連させる音の「見える化」の活動を中心として設定する（資料7）。

#### (1) 【着眼1】題材構成の工夫

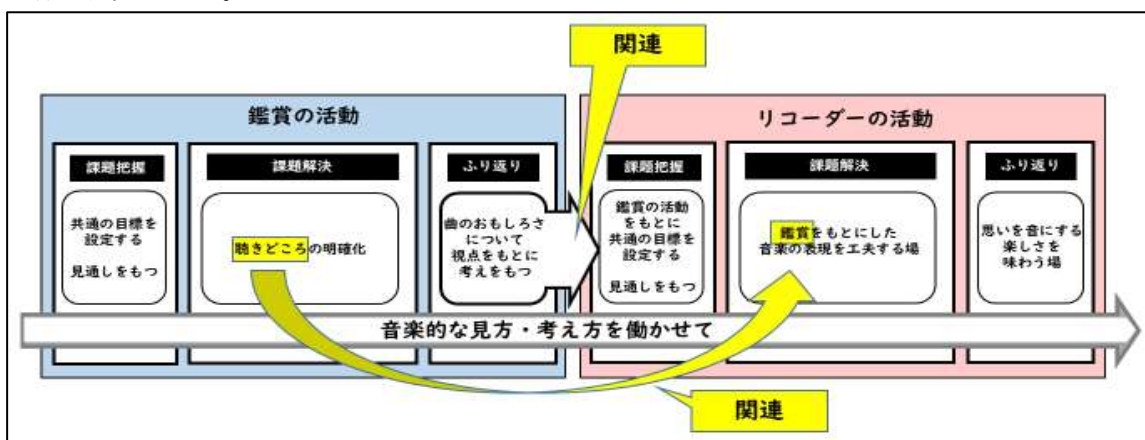
音楽的な見方・考え方を働かせることができるように、鑑賞とリコーダーの活動の関連を明確にした題材の構成を工夫する（資料8）。題材の学習過程は「課題把握」「課題解決」「振り返り」の段階として区別する。

鑑賞の活動における「課題把握」の段階では、共通の目標をもつことができるように、音楽との出会いから学習問題を設定する。また、鑑賞の活動への見通しをもつことができるように、教材曲を捉える視点を「聴きどころ」として提示し、学習の流れを共有する。「課題解決」の



段階では、自分の考えを深めたり広げたりすることができるように、「聴きどころ」を視点に音楽を捉え、協働して比較する活動を設定する。「振り返り」の段階では、学習の達成感を味わうことができるように、これまでの学習を振り返り、自分の学びや変容を自覚させる。

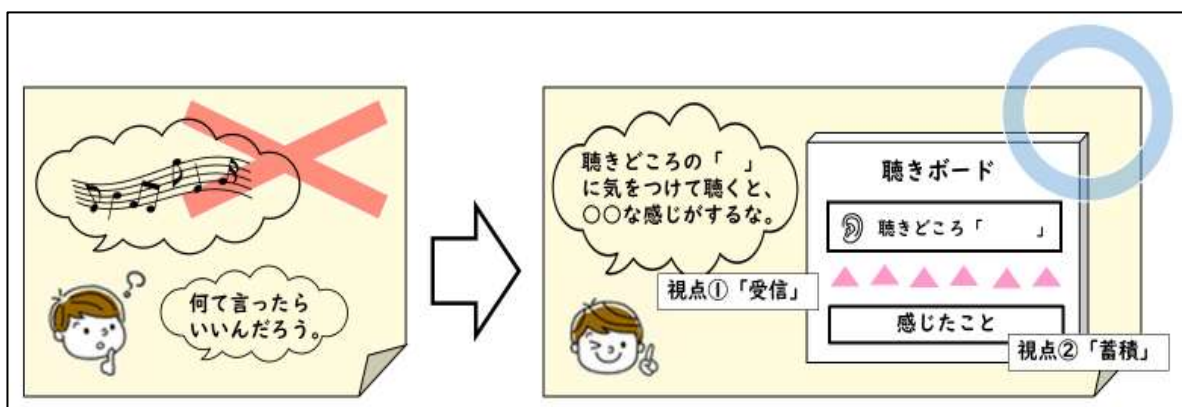
リコーダーの活動における「課題把握」の段階では、鑑賞の活動での学びを活かし共通の目標をもつことができるように、鑑賞とリコーダーの活動の関連を図る学びの足跡を活用する。また、リコーダーの活動への見通しをもつことができるように、鑑賞の活動で提示した「聴きどころ」を再確認し、表現を工夫する視点を共有する。「課題解決」の段階では、鑑賞の活動をもとに表現を工夫することができるように、鑑賞の活動での学びを元に、鑑賞とリコーダーの活動の関連を図り、表現を工夫する活動を設定する。「振り返り」の段階では、学習の達成感や音楽の楽しさを味わうことができるように、これまでの学習を振り返り、自分の学びや変容を自覚させる。



資料8 題材1について

(2) 【着眼2】音の「見える化」の活動の工夫

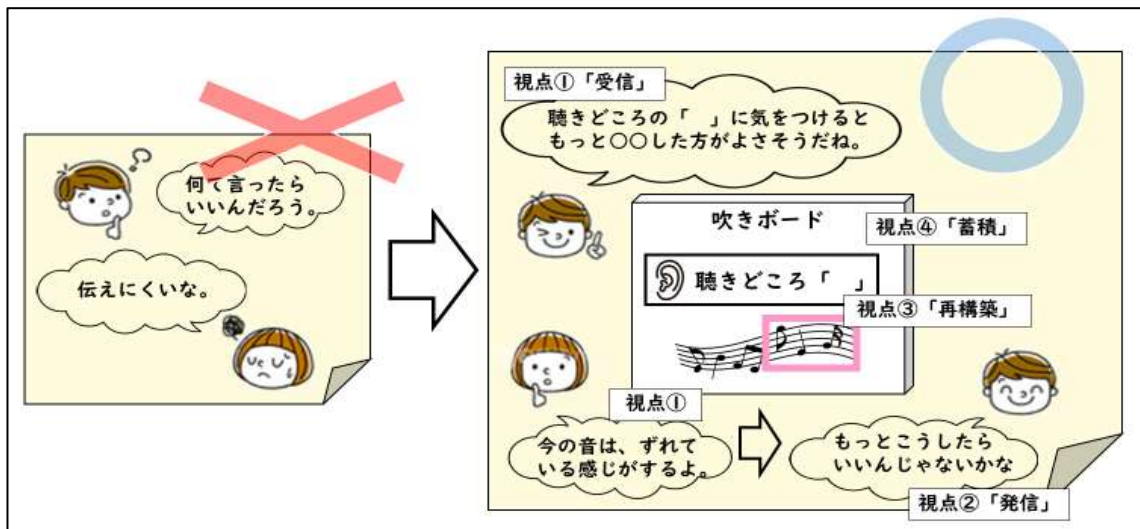
聴覚的な情報を視覚的な情報に変換することで音楽を工夫するよさを味わうことができるように、思考ツール（図や絵を活用した学習カード）で音の「見える化」の活動を設定する。



資料9 「聴きボード」の視点

鑑賞の活動において、聴覚的な情報を捉えられず思うように思考を深めることができない子供への支援とすることができるように、音の「見える化」の活動を設定する。本研究では、音楽を形づくっている要素とその働きを捉えることができるように、「聴きボード」を活用す

る(資料9)。「聴きボード」とは、音の「見える化」を図り、聴覚的な情報を捉えられず思うように思考を深めることができない子供への支援とする思考ツールのことである。「聴きボード」を活用する視点として、「①受信」「②蓄積」を設定する。「①受信」では、音楽的な見方・考え方を働かせて音楽を聴くことができるように、聴く視点として共通事項をもとに「聴きどころ」を明示する箇所を設ける。また、音楽が聴覚的なもので捉えにくいと感じる子供の支援とすることができるように、図形楽譜を載せる。「②蓄積」では、リコーダーの活動でも活用することができるように、感じたことを記入させ、ポートフォリオ化を図る。



資料10 「吹きボード」の視点

リコーダーの活動においては、自分の思いで表現を工夫している実感がなく、よさを味わうことができていない子供が音の表現を工夫することができるように、音の「見える化」の活動を設定する。本研究では、音の表現を工夫し、音楽のよさを味わうことができるように、協働学びを設定する。そのワークシートとして「吹きボード」を活用し、聴き合う活動を設定する。

「吹きボード」とは、音の「見える化」を図り、自分の思いで表現を工夫している実感がなく、よさを味わうことができていない子供への支援とする思考ツールのことである。「吹きボード」を活用する視点として、「①受信」「②発信」「③再構築」「④蓄積」を設定する(資料10)。

「①受信」では、自分のグループの音楽を捉えて工夫するところを見つけることができるように、楽譜を載せ、聴覚的な情報の音と視覚的な情報の楽譜を比べる手立てとする。また、音楽的な見方・考え方を働かせて自分の音を工夫することができるように、ここでも「聴きどころ」を提示し、鑑賞の活動との関連を図る。また、鑑賞の活動で見つけた音楽を形づくっている要素とその働きをもとに表現を工夫することができるように、「聴きどころ」と合わせた気づきを記入させる。「②発信」では、互いの考えを伝え合い、協働して解決する場を充実させることができるように、楽譜を載せ、聴覚的な情報の音と視覚的な情報の楽譜を比較して、自分の考えをつくる時に活用させる。「③再構築」では、相互の情報交換から音楽を工夫することができるように、課題に対する解決方法を視覚化して操作できる思考ツールにする。「④蓄積」では、楽しいと感じた経験を重ね、よさを味わうことができるように、活動を記録できる箇所を設ける。

## 6 研究の実際

### (1) 実践1の指導の実際と考察

#### ① 実践1の実際

##### 第4学年 音楽科（令和2年度7月中旬～実施）

題材名：歌声のひびきを感じ取ろう（教育芸術社「小学生の音楽4」）

教材名：「パパゲーノとパパゲーナの二重唱」「歌のにじ」

#### ア 抽出児の設定

日々の様子や事前アンケートの内容から、以下の子供たちを抽出児として設定し、分析を行った（表1）。

表1 抽出児と抽出した視点

視点		A児	B児	C児
関心		音楽はとても好き	音楽はとても好き	音楽はふつう
		演奏は好きであるが、みんなと学習する楽しさを感じていない。	演奏は好きであるが、みんなと学習する楽しさを感じていない。	演奏が苦手で、リーダーの活動に苦手意識がある。
思い		こんな演奏をしたいという思いをもっている。	どのように演奏するかについて思いをもっていない。	どのように演奏するかについて思いをもっていない。
工夫		曲の特徴を捉えた工夫ができない。	曲の特徴を捉えた工夫ができる。	曲の特徴を捉えた工夫ができない。
表現（言葉）		思いを言葉にすることはできるものの、演奏を聴いて感じたことは言葉で表現することができず、うまく交流することができていない。	友達との話し合いには関わることができものの、自分の考えを伝えることができず、うまく交流することができていない。	自分の言葉で表現するのが苦手で、グループでの話し合いに関わることができない。
技能	(ア)	よくできる	できる	もうすこし
	(イ)	できる	できる	もうすこし
	(ウ)	できる	もうすこし	もうすこし

抽出する視点には、「思い」「工夫」「表現（言葉）」「技能」を設定した。「技能」の視点には、学習指導要領の内容から（ア）（イ）（ウ）の3観点を設けた。

（ア） 範奏を聴いたり、ハ長調の楽譜を見たりして演奏する技能

（イ） 音色や響きに気をつけて、旋律楽器及び打楽器を演奏する技能

（ウ） 互いの楽器の音や副次的な旋律、伴奏を聴いて、音を合わせて演奏する技能

イ【着眼1】題材の構成の工夫

音楽的な見方・考え方を働かせることができるように、鑑賞とリコーダーの活動の関連を明確にした題材の構成を工夫した(表2)。評価の観点は、「知識(知)・技能(技)」、「思考・判断・表現(思・判・表)」、「主体的に学習に取り組む態度(態)」とした。

表2 題材構成

領域	段階	学習活動	評価基準(評価方法)
鑑賞	課題把握	○ 「パパゲーノとパパゲーナの二重唱」を聴いて、学習問題を設定する。 ○ 解決への見通しをもつ。	○ 曲想と二重唱の歌声の特徴、その掛け合いや重なり方の面白さに興味・関心をもち、曲や演奏のよさなどを味わって聴く学習に進んで取り組もうとしている。 <b>【態：表情観察、発言内容】</b>
	課題解決	○ 「聴きどころ」の視点をもとに音楽を聴く。 ○ 気づいたことを話し合う。	○ 曲想やその変化と、二重唱の歌声の特徴、その掛け合いや重なり方との関わりに気付いている。 <b>【知：表情観察、発言内容、記述内容】</b>
	振り返り	○ これまでの学習を振り返る。	○ 二重唱の歌声の特徴、その掛け合いや重なり方と曲想との関わりについて気付いたことを生かしながら曲や演奏のよさなどを見だし、曲全体を味わって聴いている。 <b>【思・判・表：表情観察、発言内容、記述内容】</b>
リコーダー	課題把握	○ 範奏を聴き、学習問題を設定する。 ○ 解決への見通しをもつ。	○ 主な旋律と副次的な旋律の重なり方の面白さに興味・関心をもち、表現する学習に進んで取り組もうとしている。 <b>【態：表情観察、発言内容】</b>
	課題解決	○ グループで表現を工夫する。	○ 重なり合う響きのよさを感じ取りながら、曲の特徴を捉えた表現を工夫し、どのように音を合わせるかについて思いや意図をもっている。 <b>【思・判・表：表情観察、発言内容、記述内容】</b>
	振り返り	○ 互いにグループの演奏を聴き合う。 ○ これまでの学習を振り返る。	○ 互いの歌や音を聴いて音を合わせて演奏する技能を身につけて演奏している。 <b>【技：演奏聴取、発言内容、記述内容】</b>

鑑賞の活動において、「課題把握」の段階では、共通の目標をもつことができるように、音楽との出会いから学習問題を設定した。教材曲を聴いてすぐの子供たちからは「2人の声でした。」「なんだか面白い感じがする。」「重なっている感じがする。」という反応があった。そこで、共通の目標を「2人の重なり方に気をつけて聴き、曲のおもしろさを感じ取ろう。」と設定した。また、鑑賞の活動への見通しをもつことができるように、教材曲を捉える視点の

「聴きどころ」として「重なり」を提示し、学習の流れを共有した。

「課題解決」の段階では、自分の考えを深めたり広げたりすることができるように、「聴きどころ」を視点に音楽を捉え、協働して比較する活動を設定した。実践1では、「重なり」を「聴きどころ」として提示して活動を始めたが、学習を進めると、子供たちの反応から「呼びかけとこたえ」という視点の必要性が高まり、それも加えた。

「振り返り」の段階では、学習の達成感を味わうことができるように、これまでの学習を振り返り、自分の学びや変容を自覚させた。A児の振り返りには、「最初は、なんだかおもしろいと感じていたけれど、聴きどころをもとに聴いてみると、2人の声が呼びかけたりこたえたりしているように聴こえておもしろかったのだと感じた。だから、自分もこのようなおもしろい工夫をしてみたい。」という記述があった。このことから、鑑賞の活動をもとにリコーダーの活動において表現を工夫したいという意欲を高めることができたと考えられる。

リコーダーの活動において、「課題把握」の段階では、鑑賞の活動での学びを活かし共通の目標をもつことができるように、学びの足跡を活用した。また、リコーダーの活動への見通しをもつことができるように、鑑賞の活動で提示した「聴きどころ」の「重なり」と「呼びかけとこたえ」を再確認し、表現を工夫する視点を共有した。B児から「自分たちもおもしろさを表現してみたい。」という反応があり、課題解決への意欲を高めることができたと考えられる。また、C児は、「呼びかけとこたえがこの曲にもあるようだから、わたしもおもしろさを表現したい。」という反応があった。このことから、鑑賞とリコーダーの活動を関連させることで、音楽的な見方・考え方を働かせることができていることがわかった。

「課題解決」の段階では、鑑賞の活動をもとに表現を工夫することができるように、協働して聴き合う活動を設定した。

「振り返り」の段階では、学習の達成感や音楽の楽しさを味わうことができるように、これまでの学習を振り返り、自分の学びや変容を自覚させた。B児の振り返りには、「最初は、自分も工夫できるか心配だったけれど、パパゲーノとパパゲーナの二重唱で気づいた「呼びかけとこたえ」を意識して考えると、思ったように工夫できた。」という記述があった。このことから、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情と関連付けることができていることがわかった。つまり、鑑賞とリコーダーの学習を関連させた題材構成の工夫をすることで、音楽的な見方・考え方を働かせることができたと考えられる。

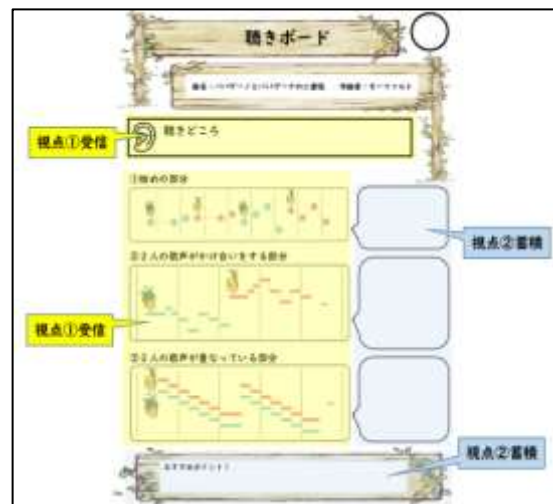
#### ウ【着眼2】音の「見える化」の活動の工夫

思いをもって表現を工夫することができるように、思考ツールを活用した音の「見える化」の活動を設定した。

鑑賞の活動においては、聴覚的な情報を捉えられず思うように思考を深めることができない子供への支援とすることができるように、音の「見える化」の活動を設定した。その際、音楽を形づくっている要素とその働きを捉えられるように、思考ツールとして「聴きボード」を活用した（資料11）。「聴きボード」には、リコーダーの活動との関連を図ることができるように、「①受信」の視点から、音楽的な見方・考え方を働かせる視点となる「聴きどころ」の「重なり」を記入させた。A児は、「聴きどころ」の「重なり」をもとに、2人の声が重な



っている時と重なっていない時があることに気が付いていた。その気付きから、A児のグループは、「重なっていない時にもおもしろさがありそうだ。」という考えを発表した。重なっていない時をよく聴く活動を設定すると、B児が「話している感じがする。」という反応をし、全体で話し合った結果、その必要性から「聴きどころ」に「呼びかけとこたえ」を加えることになった。B児のグループでは、この「呼びかけとこたえ」という視点で聴いて感じたことをもとに話し合いを進め、



資料 1 1 「聴きボード」について

「二人の歌声が重なっていない部分は、聴きどころの呼びかけとこたえに気を付けて聴くと、2人が話しているように感じた。また、聴きボードを見ると、パパゲーノの歌とパパゲーノの歌が同じように繰り返されているから、仲良くかけ合いをしているようだった。」と発表した。このことから、音楽的な見方・考え方を働かせる視点となる「聴きどころ」を記入させた「聴きボード」を活用することで、音楽を形づくっている要素とその働きを捉えられたということがわかった。

リコーダーの活動においては、自分たちで音楽を工夫している実感がなく、よさを味わうことができていない子供が協働して音の表現を工夫することができるように、音の「見える化」の活動を設定した。リコーダーの活動では、音楽的な見方・考え方を働かせて自分の音を工夫することができるように、鑑賞の活動と関連を図った。その際、協働して音の表現を工夫し、音楽のよさを味わうことができるように、協働学びのワークシートとして「吹きボード」を活用した



資料 1 2 「吹きボード」について

(資料 1 2)。「吹きボード」には、「①受信」の視点から、鑑賞の活動で見つけた音楽を形づくっている要素とその働きをもとに表現を工夫することができるように、「聴きどころ」の「重なり」「呼びかけとこたえ」を視点に工夫するところを記入させた。また、グループで活動する場面では、工夫するところを見つけることができるように、「吹き役」と「聴き役」の役割分担をするように促し、自分の役割を明確にさせた。C児のグループでは、3段目の旋律に注目し、話し合っていた。C児は、「聴きどころの呼びかけとこたえをもとに楽譜を見ると、この3段目は歌とリコーダーの旋律がかけ合っているようだ。歌を意識してリコーダーを吹くと、うまくかけ合いをすることができそうだ。」と話していた。その考えをもとに吹き役が演奏すると、同じグループの聴き役の子供が「今のように意識した方が、かけ合いができていて、きれいに聴こえた。」と反応した。このことから、鑑賞の活動と関連を図ることで、

音楽的な見方・考え方を働かせて自分の音を工夫することができたとわかった。また、A児は、吹きボードを活用し「この旋律の形が似ているから呼びかけとこたえの工夫ができるのではないか。」と話し合っていた。このことから、協働学びのワークシートとして「吹きボード」を活用することで、協働して音の表現を工夫することができたとわかった。

## ② 考察

実践1の学習後に活動をふり返るアンケートを実施したところ、演奏することは好きであるものの、どのように演奏するかについて思いをもっていなかったB児は、「もっと工夫して吹けるようになりたいと思うようになった。」と答えた。また、「パパゲーノは呼びかけと答えがはっきりして面白かったので、もっとそんなふうに吹けるようになりたい。」と記述しており、音楽を形づくっている要素の視点から音楽を捉え、自己の感情と関連付けて楽しむことができていた(資料13)。このことから、音楽的な見方・考え方を働かせることができるように、鑑賞とリコーダーの活動の関連を明確にした題材の構成を工夫することは有効であったと考える(着眼1)。一方で、題材を通した学習問題が明確ではなかったため、鑑賞とリコーダーの活動の連続性を感じにくかったようである。

最初は楽譜の通りに吹けるようになりたい  
 と思っていたけれど、音楽の学習をして、  
 と工夫して吹けるようになりたいと思う  
 ようになりました。特にグループで吹き  
 ボードを使うと、ききとこの重なりを  
 つけるポイントが分かり、工夫しやすか  
 たです。また、自分の意見が伝えられ  
 てうれしかったです。前にきいたパパ  
 ゲノは呼びかけと答えがはっきりして  
 面白かったので、もっとそんなふう  
 に吹けるようになりたいです。

資料13 B児のふり返り

また、実践1の活動後にアンケートを実施したところ、「吹きボードがあると工夫しやすかったか。」という項目について、9割の子供が「4(とても工夫しやすかった)」と答えた。その理由として、「キーワードや気をつけるところがわかりやすい。(資料14)」、「思いを表現しやすかった。(資料15)」等があった。

④「吹きボード」があると工夫しやすかったですか。 ④・3・2・1  
 理由  
 吹きボードがあると、吹きボードに書いてある文字や気  
 けるところが、分かりやすく、吹けるから。

資料14 回答理由①

④「吹きボード」があると工夫しやすかったですか。 ④・3・2・1  
 理由  
 ロアボードがあると、たぶんここがうたか  
 て、あらわしやすかった。たのしいと思ったから。

資料15 回答理由②

このことから、聴覚的な情報を視覚的な情報に変換することができるように、思考ツールを活用した音の「見える化」の活動を設定することは有効であったと考える(着眼2)。一方で、このように演奏したいという思いはあったものの、自分たちの課題を把握しないまま活動を進めたため、工夫する見通しが明確ではなく、音楽を工夫するよさを味わうことができていなかった児童もいた。

④友達と交流しながら学習することは楽しかったですか。 ④・3・2・1  
 理由  
 友達の意見を聞いたりと、楽しかったから。

資料16 A児の記述

さらに、「友達と交流しながら学習することは楽しかったか。」という項目について、9割の子供が「4(とても楽しかった)」と答えた。演奏は好きであるが、みんなと学習する楽しさは感じていなかったA児は、「いろいろな意見を聞いて考えが変わったから、とても楽しかった。」と答えた(資料16)。このことから、音楽を工夫するよさを感じるこ

ができていたと考える。一方で、グループの人数構成を5人としたため、聴き役の子供が一人になったことで、うまく言葉にすることができない時に工夫の効果について迷う場面があり、工夫することによる演奏効果の変化を十分に感じることはできなかった児童もいた。

(2) 実践1の成果・課題からの修正点

表3 実践1の成果・課題

成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 題材の構成を工夫したことによって、鑑賞の学習をもとにリコーダーの学習に取り組むことができた。さらに、表現への思いをもって学習に取り組んだり、工夫する見通しをもったりすることができていた（着眼1）。</li> <li>・ 音の「見える化」ボードを活用したことによって、視覚的に音楽を捉えることができ、音楽が捉えづらく苦手と感じていた子供たちへの支援となった（着眼2）。</li> <li>・ 「聴きどころ」を明示したことによって、視点をもとに音楽を聴いたり工夫したりすることや自分の思いと関係づけることができており、音楽的な見方・考え方を働かせることができた（全体を通して）。</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学習ごとの学習問題は設定していたものの、題材を通した学習問題が明確ではなかったため、鑑賞とリコーダーの活動の連続性を感じにくかった（着眼1）。</li> <li>・ このように演奏したいという思いはあったものの、自分たちの課題を把握しないまま活動を進めたため、工夫する見通しが明確ではなく、音楽を工夫するよさを味わうことができていなかった（着眼2）。</li> <li>・ グループの人数構成を5人としたため、聴き役の子供が一人になったことで、うまく言葉にすることができない時に工夫の効果について迷う場面があり、工夫することによる演奏効果の変化を十分に感じることはできなかった（全体を通して）。</li> </ul>

より音楽的な見方・考え方を働かせて、音楽を工夫するよさを味わうことができるように

修正点

- ① 鑑賞とリコーダーの活動の連続性を子供が感じることができるように、題材を通した学習問題を設定する（着眼1）。
- ② 工夫する見通しを明確にし、そのよさを味わうことができるように、自分たちの課題を客観的に捉えさせ、このように演奏したいという思いと比較させる（着眼2）。
- ③ 工夫することによる演奏効果の変化を十分に感じるように、グループの人数構成を6人として、聴き役の子供が工夫の効果について話し合う活動を設定する（全体を通して）。

### (3) 実践2の指導の実際と考察

#### ① 実践2の実際

第4学年 音楽科（令和2年度11月中旬～実施）

題材名：せんりつの重なりを感じ取ろう（教育芸術社「小学校の音楽4」）

教材名：「ファランドール」「オーラリー」

ア 抽出児の設定

実践1を踏まえ、以下の子供たちを抽出児として設定し、分析を行った（表4）。

表4 抽出児と抽出した視点

視点	C児	D児	E児
関心	音楽は好き	音楽は好き	音楽はふつう
	少しずつリコーダーに慣れてきており、苦手意識がなくなりつつある。	演奏は好きであるが、みんなと学習する楽しさは感じていない。	演奏は好きであるが、みんなと学習する楽しさは感じていない。
思い	こんな演奏をしたいという思いをもっている。	こんな演奏をしたいという思いをもっている。	どのように演奏するかについて思いをもっていない。
工夫	工夫しようとするものの、曲の特徴は捉えることができない。	曲の特徴を捉えた工夫ができる。	曲の特徴を捉えた工夫ができない。
表現 (言葉)	グループの話し合いに関わろうとするものの、自分の考えを伝えることができず、受け身な姿が見られる。	自分の考えを言葉で表現することができるものの、グループ活動があまり充実していない。	友達との話し合いには関わることはできるものの、自分の考えを伝えることができない。
技能	(ア) できる	よくできる	もうすこし
	(イ) できる	よくできる	もうすこし
	(ウ) もうすこし	できる	もうすこし

抽出する視点には、実践1と同様に、「思い」「工夫」「表現（言葉）」「技能」を設定した。「技能」の視点には、学習指導要領の内容から（ア）（イ）（ウ）の3観点を設けた。

- (ア) 範奏を聴いたり、ハ長調の楽譜を見たりして演奏する技能
- (イ) 音色や響きに気をつけて、旋律楽器及び打楽器を演奏する技能
- (ウ) 互いの楽器の音や副次的な旋律、伴奏を聴いて、音を合わせて演奏する技能

#### イ【着眼1】題材の構成の工夫

音楽的な見方・考え方を働かせることができるように、鑑賞とリコーダーの活動の関連を

明確にした題材の構成を工夫した(表5)。また、実践1の修正点①から、鑑賞とリコーダーの活動の連続性を子供が感じることができるように、「せんりつの重なりを感じ取ろう」という題材を通した学習問題を設定した。

表5 題材構成

領域	段階	学習活動	評価基準(評価方法)
鑑賞	課題把握	○ 「ファラドール」を聴いて、学習問題を設定する。 ○ 解決への見通しをもつ。	○ 曲想と旋律の特徴との関わりや重なりによる面白さに興味・関心をもち、曲や演奏のよさなどを味わって聴く学習に進んで取り組もうとしている。 【態：表情観察、発言内容、記述内容】
	課題解決	○ 視点をもとに音楽を聴く。 ○ 気づいたことを話し合う。	○ 曲想やその変化と、旋律の特徴や反復、重なりなどによる音楽の構造との関わりに気付いている。 【知：表情観察、発言内容、記述内容】
	振り返り	○ これまでの学習を振り返る。	○ 旋律の特徴や重なりなどによる音楽の構造との関わりについて気付いたことを生かしながら曲や演奏のよさなどを見だし、曲全体を味わって聴いている。 【思・判・表：表情観察、発言内容、記述内容】
リコーダー	課題把握	○ 範奏を聴き、学習問題を設定する。 ○ 解決への見通しをもつ。	○ 曲想と音楽の構造との関わり、リコーダーの音色や響きと演奏の仕方との関わりについて興味・関心をもち、表現する学習に進んで取り組もうとしている。 【態：表情観察、発言内容、記述内容】
	課題解決	○ グループで表現を工夫する。	○ 曲想と音色や旋律、音の重なりなどとの関わりについて考え、旋律の特徴や重なりを捉えた表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いや意図をもっている。 【思・判・表：表情観察、発言内容、記述内容】
	振り返り	○ 互いにグループの演奏を聴き合う。 ○ これまでの学習を振り返る。	○ 音色や響きに気を付けて演奏する技能、互いの楽器や音や副次的な旋律を聴いて音を合わせて演奏する技能を身に付けて演奏している。 【技：演奏聴取、発言内容、記述内容】

鑑賞の活動において、「課題把握」の段階では、共通の目標をもつことができるように、音楽との出会いから学習問題を設定した。教材曲を聴いてすぐの子供たちからは「旋律が重なっていて、なんだかきれいな感じがする。」という反応があった。そこで、共通の目標を「2



つの旋律の重なりに気をつけて聴き、そのよさを感じ取ろう。」と設定した。また、鑑賞の活動への見通しをもつことができるように、教材曲を捉える視点の「聴きどころ」として「旋律」と「重なり」を設定し、学習の流れを共有した。

「課題解決」の段階では、自分の考えを深めたり広げたりすることができるように、「聴きどころ」を視点に音楽を捉え、協働して比較する活動を設定した。C児は、「王の行進は、堂々とした感じがするけれど、馬のダンスは、はねている感じがする。旋律の特徴がちがう。」と発言した。また、旋律が重なっている曲の後半部分になると、D児は、「旋律が重なると、響きが豊かになって、にぎやかな感じがする。なんだかすごい。」と発言した。

「振り返り」の段階では、学習の達成感を味わうことができるように、これまでの学習を振り返り、自分の学びや変容を自覚させた。E児の振り返りには、「最初は、なんだかおもしろいと感じていたけれど、聴きどころをもとに聴いてみると、違う特徴の旋律が重なって、とてもにぎやかになっている感じに聴こえておもしろかったのだとわかった。だから、自分もこのようなすてきな工夫をしてみたい。」という記述があった。このことから、鑑賞の活動をもとにリコーダーの活動への意欲を高めることができたと考える。

リコーダーの活動において、「課題把握」の段階では、鑑賞の活動での学びを活かし共通の目標をもつことができるように、鑑賞とリコーダーの活動の関連を図る学びの足跡を活用した。また、リコーダーの活動への見通しをもつことができるように、鑑賞の活動で提示した「聴きどころ」の「旋律」と「重なり」を再確認し、表現を工夫する視点を共有した。さらに、実践1の修正点②から、工夫する見通しを明確にし、音楽を工夫するよさを味わうことができるように、自分たちの課題を客観的に捉えさせ、このように演奏したいという思いと比較させた。E児は「なんだかずれている。ちゃんと重なるようにして、もっときれいに吹きたい。」と反応した。このことから、鑑賞とリコーダーの活動を関連させることで、音楽的な見方・考え方を働かせたり、課題解決への意欲を高めたりすることができたと考える。また、C児は、「この曲にもあるようだから、わたしもおもしろさを表現したい。」と反応した。このことから、課題を認識させることで、自分たちの工夫点が見つかり、解決への見通しをもつことができたことがわかった。

「課題解決」の段階では、鑑賞の活動をもとに表現を工夫することができるように、鑑賞とリコーダーの活動の関連を図って表現を工夫する活動を設定した。

「振り返り」の段階では、学習の達成感や音楽の楽しさを味わうことができるように、これまでの学習を振り返り、自分の学びや変容を自覚させた。E児の振り返りには、「相手を意識して吹くと、きれいに重ねることができて嬉しかった。もっときれいなオーラリーに仕上げたい。」という記述があった。このことから、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情と関連付けることができていることがわかった。つまり、鑑賞とリコーダーの学習を関連させた題材構成の工夫をすることで、音楽的な見方・考え方を働かせることができたと考える。また、題材を通した学習問題を設定したことで、子供が学習の連続性を感じることもできたことがわかった。

ウ【着眼2】音の「見える化」の活動の工夫

思いをもって表現を工夫することができるように、思考ツールを活用した音の「見える化」の活動を設定した。

鑑賞の活動においては、聴覚的な情報を捉えられず思うように思考を深めることができるように、音の「見える化」の活動を設定した。その際、音楽を形づくっている要素とその働きを捉えられるように、図形楽譜として「聴きボード」を活用した。(資料17)「聴きボード」には、リコーダーの活動との関連



資料17 「聴きボード」について

を図ることができるように、音楽的な見方・考え方を働かせる視点となる「聴きどころ」の「重なり」を記入させた。D児のグループは、「聴きどころ」の「重なり」をもとに話し合い、二つの旋律が重なると響きの印象が変わることに気が付いていた。このことから、音楽的な見方・考え方を働かせる視点となる「聴きどころ」の「重なり」を記入させた「聴きボード」を活用することで、音楽を形づくっている要素とその働きを捉えられたということがわかった。

リコーダーの活動においては、交流して音楽を工夫している実感がなく、音楽を工夫するよさを味わうことができていない子供が協働して音の表現を工夫することができるように、音の「見える化」の活動を設定した。リコーダーの活動では、音楽的な見方・考え方を働かせて自分の音を工夫することができるように、鑑賞の活動と関連を図った。その際、協働して音の表現を工夫し、音楽のよさを味わうことができるように、協働学びのワークシートとして「吹きボード」を活用した(資料18)。「吹きボード」には、鑑賞の活動で見つけた音楽を形づくっている要素とその働きをもとに表現を工夫することができるように、「聴きどころ」の「重なり」を視점에気付いたことを記入させた。実践1の修正点②から、工夫する見通しを明確にし、そのよさを味わうことができるように、自分たちの課題を客観的に捉えさせ、このように演奏したいという思いと比較させた。C児のグループでは、1段目の旋律に注目し、話し合っていた。C児は、「聴きどころの『重なり』に気をつけて聴くと、ずれているところがある。もっと合わせたら、きれいなオーラリーになりそう。」と話していた(資料19)。このことから、自分たちの課題を客観的に捉えさせ、このように演奏したいという思いと比較させることで、工夫する見通しを明確にさせることができたことがわかった。



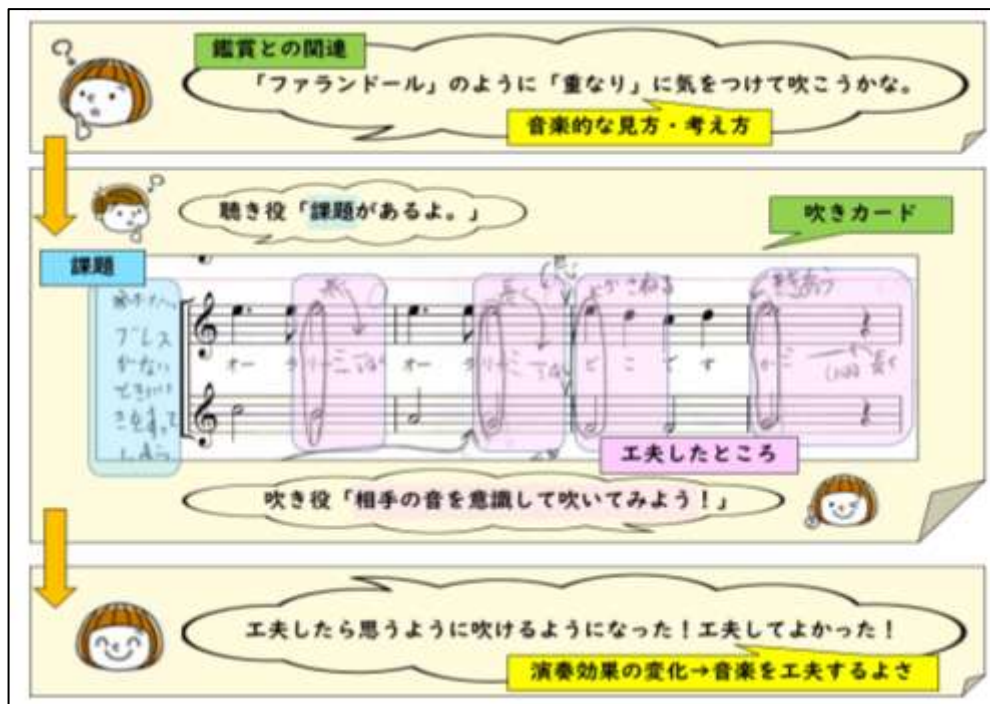
資料18 「吹きボード」について

くっている要素とその働きをもとに表現を工夫することができるように、「聴きどころ」の「重なり」を視점에気付いたことを記入させた。実践1の修正点②から、工夫する見通しを明確にし、そのよさを味わうことができるように、自分たちの課題を客観的に捉えさせ、このように演奏したいという思いと比較させた。C児のグループでは、1段目の旋律に注目し、話し合っていた。C児は、「聴きどころの『重なり』に気をつけて聴くと、ずれているところがある。もっと合わせたら、きれいなオーラリーになりそう。」と話していた(資料19)。このことから、自分たちの課題を客観的に捉えさせ、このように演奏したいという思いと比較させることで、工夫する見通しを明確にさせることができたことがわかった。



資料19 C児の発言について

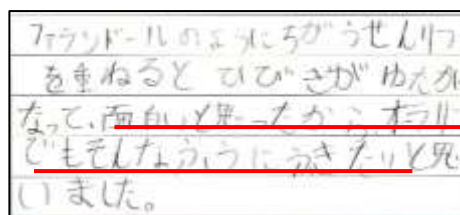
また、実践1の修正点③から、工夫することによる演奏効果の変化を十分に感じることができるよう、グループの人数構成を6人として、聴き役の子供が工夫の効果について話し合う活動を設定した。D児のグループは、吹きボードを活用し「この音がずれているから合わせたい。どうしたら音が合うのだろう。」と話し合っていた。そして、聴き役の2人がいろいろなアドバイスをしたり、吹き役の4人が試行錯誤したりして、相手の音を意識して吹くことで音を合わせることを見つけた。D児は、「これまで、自分の音ばかりで横（自分の音の流れ）のことを考えていたけれど、合わせるためには、相手のことを考えて縦（自分と友達の音のずれ）を意識した方がよい。」と考えをまとめていた（資料20）。このことから、聴き役の子供が工夫の効果について話し合う活動を設定したり、協働学習のワークシートとして「吹きボード」を活用したりすることで、工夫することによる演奏効果の変化を感じ、協働して音の表現を工夫することができたとわかった。



資料20 D児のグループの活動の流れ

## ② 考察

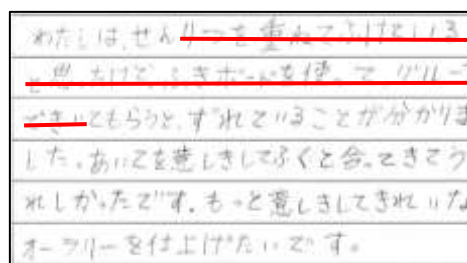
実践2の鑑賞の学習後、活動をふり返るアンケートを実施したところ、どのように演奏するかについて思いをもっていなかったE児は、「ファランドールのように違う旋律を重ねると響きが豊かになって面白いと思った。だから、オーラリーでもそんなふうに吹きたいと思った。」という記述をしていた(資料2 1)。つまり、音楽的な見方・考え方を働かせることができたと考える。このことから、鑑賞とリコーダーの活動の連続性を子供が感じることができるように、題材を通した学習問題を設定することは有効であったと考える(着眼1)。また、自分の考えを言葉で表現することができるものの、友達の考えには共



ファランドールのよみちがうせんりつ  
を重ねるとひびきがかうか  
なて、面白く思てたからオーラ  
でもそんなふうにかうか  
いました。

資料2 1 E児のふり返り

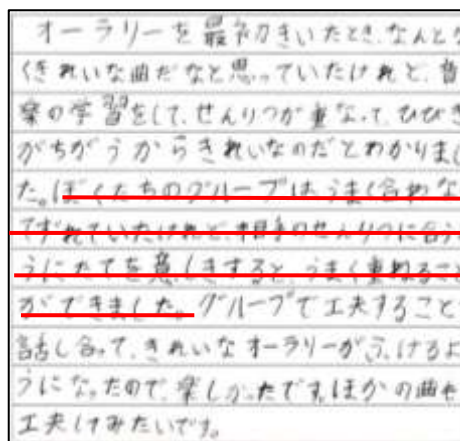
感できず、グループ活動があまり充実していなかったD児は、「旋律を重ねて吹けていると思っていたけれど、吹きボードを使って、グループで聴いてもらうと、ずれていることがわかった。」という記述をしていた(資料2 2)。このことから、工夫する見通しを明確にし、そのよさを味わうことができるように、自分たちの課題を客観的に捉えさせ、このように演奏したいという思いと比較させることは有効であったと考える(着眼2)。一方で、視覚的な情報ばかりに頼っているグループもあり、課題と捉える。



わたしは、せんりつを重ねて吹いている  
曲もけとくきかいて使て、グループ  
で吹くともうと、すれとわることがかり  
ました。あつてをきかしてぶくと合ときさう  
れしかたです。もつて意きしてきか  
オーラリーをけよけたいです。

資料2 2 D児のふり返り

グループの話し合いに関わろうとするものの、自分の考えを伝えることができず、受け身な姿が見られたC児は、「ぼくたちのグループは、うまく合わなくてずれていたけれど、相手の旋律に合うように縦を意識すると、うまく重ねることができた。グループで工夫することを話し合つて、きれいなオーラリーが吹けるようになったので、楽しかった。」と記述していた(資料2 3)。このことから、工夫することによる演奏効果の変化を十分に感じることができるように、グループの人数構成を6人として、聴き役の子



オーラリーを最うかきかいたとき、なんとな  
きれいな曲だなと思つていたけれど、音  
楽の学習をして、せんりつを重ねて、ひびき  
がちがうからきれいなのだとわかりまし  
た。ぼくたちのグループは、まじ(合わなく  
ずれていたけれど、相手のせんりつに合)と  
うにたてを意(き)かすると、うまく重ねること  
ができました。グループで工夫することを  
話し合つて、きれいなオーラリーが吹けるよ  
うになったので、楽しかった。ほかの曲も  
工夫けたいです。

資料2 3 C児のふり返り

児が工夫の効果について話し合う活動を設定することは有効であったと考える。一方で、ずれを感じにくい子供もおり、聴く力が低い子供への手立てが不十分であり、課題と捉える。

## 7 成果と課題

### (1) 全体考察

本研究の事前アンケートと事後アンケートを比較し、分析をした。事前のアンケートにおいて、リコーダーの活動について関心を示したのは、57%の子供であったが事後のアンケートでは、89%の子供が関心を示し、肯定的な回答をする子供が32%増えた(資料2 4)。





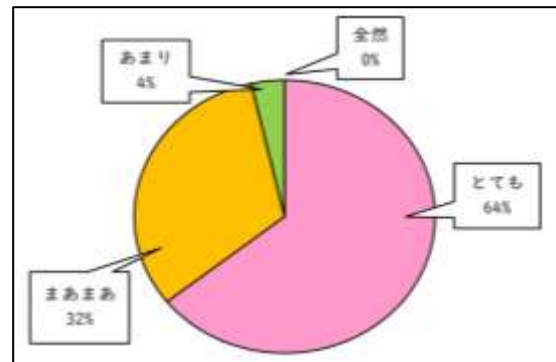
資料24 「リコーダーの活動に関心があるか」

また、鑑賞とリコーダーの活動の関連を図る題材の構成の工夫をしたことで、「自分もあのような工夫をしたい。」「こんなふうに吹きたい。」という思いをもって主体的に活動する子供が増えた。F児は事後アンケートの自由欄において、「初めはリコーダーもあまり吹けなかったし、あまり楽しくなかったけれど、今は大分吹けるようになった。とても楽しくなった。」と書いており、リコーダーに対して関心が高まったことがわかった(資料25)。

四年生の音楽の学習で、いろんな歌なども歌って、初めはリコーダーもあまり吹けなかったし、あまり楽しくなかったけれど、今は大分吹けるようになった。とても楽しくなった。というふうになりました。とても楽しくなった。という変化。リコーダーも一年くらい見つけることができました。今はとても音楽が大好きになりました。リコーダーが大好きなので、これを五年生の学習でいかにいいことか。

資料25 F児の記述(一部)

事後アンケートの「吹きボードは効果的であったか」という項目に対して、肯定的な回答をしたのは96%の子供であり、大多数の子供にとって有効であったとわかった(資料26)。その理由として、「自分の工夫したいところがわかりやすく、そのおかげで交流しやすくなった。」「吹きボードがあると、どこを工夫したいか伝えやすくなって、説明できた。」等があった。また、自分の思いと課題を比較させたことで音楽を工夫するよさを感じることができていた。G児は、事後アンケートの「吹きボードは効果的であったか」の項目に対して「4(とてもあてはまる)」と答え、その理由として、「最初は思うように吹けなかったけれど、友達から教えてもらってコツをつかむことができました。だから、自分も友達に教えたいです。」と書いていた(資料27)。このことから、吹きボードが交流を充実させる手立てになっていることがわかった。



資料26 「吹きボードは効果的であったか」

音楽の学習で、最初は何も吹けなかったけれど、友達から教えてもらってコツをつかむことができました。だから、自分も友達に教えたいです。

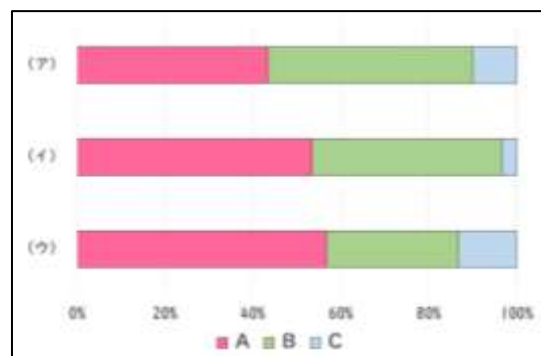
資料27 G児の記述(一部)

最後に、事前評価と同様に、技能について評価したところ、9割程度の子供が目標を達成することができていることがわかった(資料28)。このことから、題材構成の工夫をしたり、音の「見える化」の活動を工夫したりすることで、音楽を工夫するよさを感じる経験を重ねなが



ら、技能を高めることができたと考える。つまり、音楽を工夫するよさを味わいながら思考を働かせたことで、技能の高まりが見られたといえる。

これらのことから、鑑賞とリコーダーの活動を関連させる音の「見える化」の活動を中心として設定することで、音楽的な見方・考え方を働かせて、音楽を工夫するよさを味わわせることができることがわかった。



資料28 事後評価

## (2) 成果

実践1の修正点から実践2に取り組み、以下のような成果が得られた。

### 着眼1について

- 題材の構成を工夫したことで、鑑賞とリコーダーの活動の関連性を明確にすることができ、音楽的な見方・考え方を働かせる子供の姿が多く見られた。
- 題材の構成を工夫したことで、系統的・計画的に活動を進めることができた。
- 他領域との関連を図ったことで、知識や技能を生かしながら思考力・判断力・表現力を高めることができた。
- 聴きどころを明示したことで、音楽的な見方・考え方を働かせるきっかけを作ることができ、音楽を捉える視点や気づきを共有しやすかった。

### 着眼2について

- 音の「見える化」を図ったことは、聴覚的な情報を視覚的な情報に転換することができ、思考を深めることができた。
- 交流する活動において、視覚的に比較することができ、気づきの深まりが見られた。
- 「聴きボード」を活用したことで、音楽を形づくっている要素とその働きを捉えて鑑賞することができた。
- 「吹きボード」を活用したことで、自分の思いを表現しやすくなり、音楽を工夫しやすくなった。

以上のことから、音楽を工夫するよさを味わう子供に迫ることができたと考える。

## (3) 今後の課題

- 視覚的な情報ばかりに頼らず、聴覚的な情報にも関心をもつことができるような手立ての工夫が必要である。
- 聴く力が低い子供や技能がC評価の子供への手立てを設定する必要がある。
- 旋律を感じ取ることができているかについて、見取る評価基準と評価方法が曖昧であった。

### <参考文献>

- ・「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」平成28年12月，中央教育審議会
- ・「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編」，文部科学省
- ・「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編」，文部科学省
- ・「小学生の音楽4」，教育芸術社
- ・「小学生の音楽4 指導書 実践編・研究編・鑑賞用CD」，教育芸術社
- ・「初等教育資料2018年7月号」，東洋館出版社
- ・「田村学・黒上晴夫『深い学び』で生かす思考ツール」，田村学・黒上晴夫，小学館
- ・「音楽授業の『見方・考え方』 成功の指導スキル&題材アイデア」，音楽授業ラボラトリー研究会，明治図書
- ・「クラスが元気になる！『学び合い』スタートブック」，西川純，学陽書房
- ・「小学校音楽イチ押し授業モデル 中学年」，今村行道・津田正之，明治図書